邪馬台國論争

田和山サポートクラブ　副会長　堀　晄

世の中に「邪馬台國論争」なるものが存在するらしい。日本中に候補地があって、まるで「〇〇殺人事件」のように、ご当地仮説が乱立している。そのような本を書くとそこそこ５千部は売れるので、なんとかペイするらしい。しかし、流行作家じゃあるまいし、考古学者までがそのような論争に参加し、侃々諤々という状況が何十年も続いているのは常軌を逸している。

邪馬台國にしろ卑弥呼にしろ固有名詞が出てくるので、これは文献学から接近するほかはないので、考古学者が論争に加わる資格はない。文献学で候補地が決まったら、そこを発掘するときに出陣すればいいだけである。で、その頃の文献が中国の二十四史しかないので、それの記述を分析し候補地を絞ればよい。これは世界の常識で、最古の文字が発明されたメソポタミアでも、このような手続きを経て古代地名を比定していくのである。最初から考古学者が口角唾を飛ばして議論するような日本の状況は、世界の常識からは「ありえへん」のです。かって関和彦さんとお酒を飲んだ時、なぜ邪馬台國関西論があり得るのかさっぱりわからないと質問したら、考古学者には邪馬台國が當時の日本で一番力の強い栄えた国だったという思い込みがある…とおっしゃり、始めてそーなんだと納得しました。

でもって、邪馬台國がどこにあるかと言えば、倭の筑紫であると記されており(隋書倭国伝：倭国在百済新羅東南水陸三千里、…其國境東西五月行南北三月行各至於海、新唐書倭国伝：日本古倭奴古也…居筑紫城…神武…天皇為號徒治大和州…)、それ以上の論議は必要はないだろう。倭というのは四方を海に囲まれた大きな島で、真ん中に阿蘇が火を噴いているという記述（旧唐書倭国の条）にある通り、九州を指すことは中国の考古学者の常識（日本の考古学者の非常識）である。それに

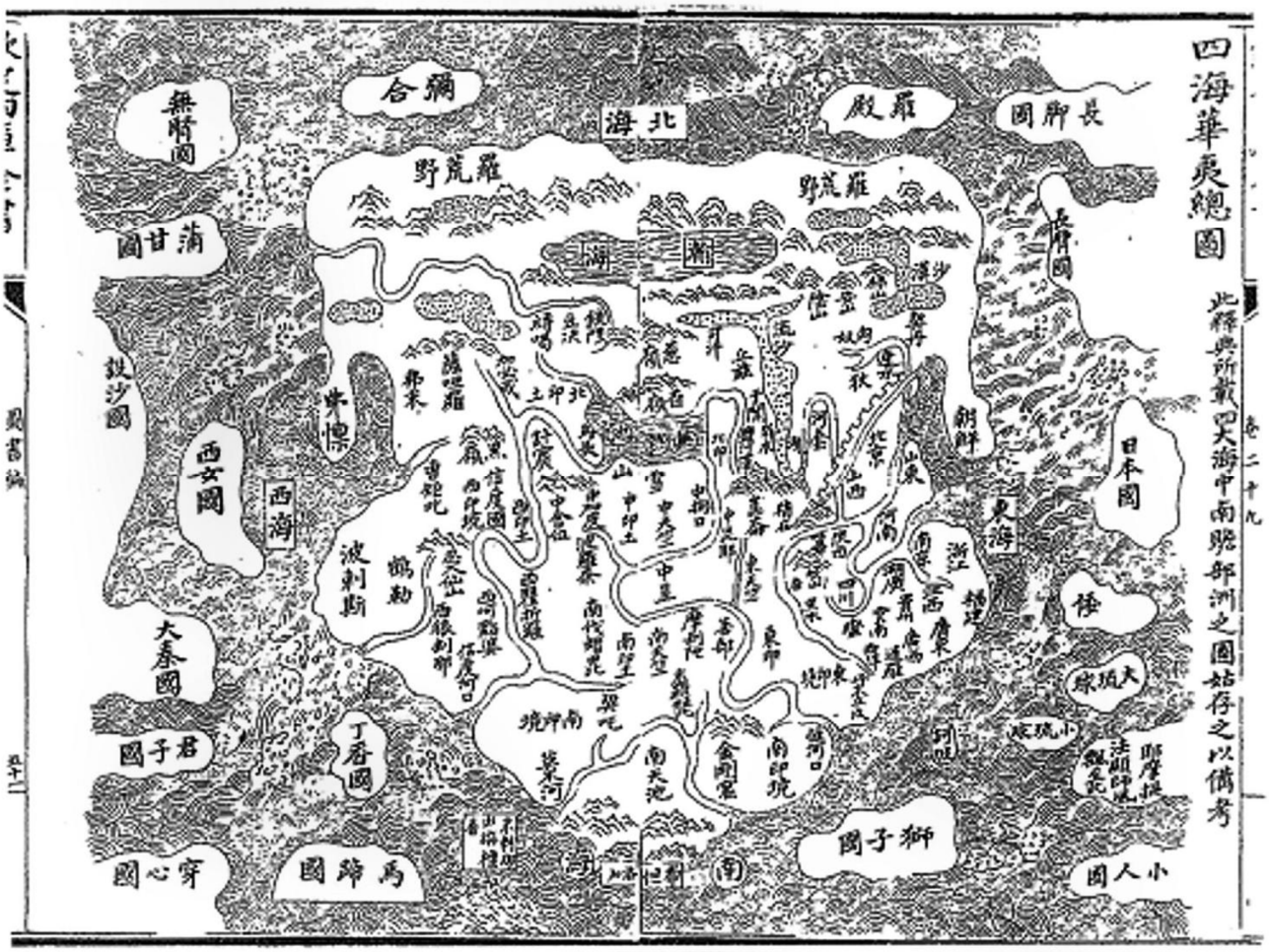
対し大和勢力の「日本國」は、西と南が海で、北と東は山、特に東の山の向こうには「毛人」が居ると記されている（同上日本國の条）から、近畿を中心とした地域を指していることは自明でしょう。

倭國は代々中国に朝貢してきており、後漢の光武帝の時倭奴（ワヌ）國が（後漢書)、そして魏時代には卑弥呼が（魏書倭國の条）金印を授与されている。このことは倭國のことで、大和朝廷には関係ないので、日本書紀にはもちろん記されていない。さらに宋時代には讃、珍、済、興、武の五王が官位を認めてくれと使いを寄越したと記されている（宋書倭國伝)。これに対し日本國が中国に初めて使いを寄越したのは隋の開皇末年、7 世紀初頭のことで、はるかに遅れて登場したのである（旧唐書日本國の条)。4 世紀末～5 世紀初頭の高句麗と倭國の戦争については高句麗好太王の碑文に詳しいが、日本國と全く関係がないことは日本書紀に関連する記述がないことで明白であろう。

では邪馬台國は筑紫の何処か？という問題を解明するには、考古学者が綿密な現地調査をすればよいだけである。そのときに参考になるのが、われらが誇り『田和山遺跡』なのである。私は松江にＵターンし、妻が市民病院に入院した時に初めて田和山遺跡に登ったが、その時の第一印象は「これは魏志倭人伝の卑弥呼の宮殿の記述とまったく一致する」ということであった。これを戦争の砦だ（その最たるはつぶて石論で、英語のコブルに相当する大きな石を砦から投げて攻撃したという。コブルはローマの道路敷石を指し、投石機でもって初めて戦争に使える大きさである。極東には投石器がないので、あの石を戦争で使うことはできない）とか物見櫓、更にはお祭りの場所であるなどと想定する考古学者もいると初めて知って、正気かしらと疑ったくらいである。

田和山時代の松江の中心は言うまでもなく意宇（オウ、ちなみにイウという呼び名は国土交通省が勝手に現地に相談なく決めたもので全く無意味）であり、田和山

は隠れ里であった。卑弥呼の宮殿も田和山と同じような辺鄙なところにあったに違いない。墓は径 100 歩と記録されているので、宮殿の近くに相当大きな円墳があったに違いない（前方後円墳は長さで測る）。人里離れた山奥と思われ、現在でもそのままの姿で残っている可能性が高く、これこそ航空写真考古学の出番であろう。冬に撮影された航空写真や Google Earth をルーペで覗くと、日本史上の最高機密が明らかになること請け合い。さあ、みんなも探してみよう！



四海華夷総圖（世界地図）1532 年刊　ハーバード大学蔵
日本國、倭、大琉球（沖縄）、小琉球（台湾）の記述に注目